心理学シリーズ番外編<その4>

～T 教授の観察ノートから～

2008.7.15　　タツノオトシゴ

T 教授の研究室、何やら怪しげな儀式の準備をしています。
夕食も終わり、今日はＳ婦人が特別に降霊会をする事に･･･

前回、Ｔ教授のメモに書いてあった場面をチョッと再現してみます。

ダビデの星の中央に蜀台が置かれ､2 本の捩れた真っ赤なローソクに火が点されました。Ｓ婦人（Ｔ教授の従妹：ヘレーネ･プライスヴェルク）が例の黒い箱を持ち出し、中を覗き込み何かを探している様子です。その箱にはローソク以外にも何かが入っていたようです。やがて奥から小さな紙包みを二つ取り出し、匂いを嗅ぎながら何かを確認し、その一つを真ん中の香炉へと持って行き、残りの一つを静かにローソクに振りかけました。

その時、紫色の煙が立ち昇り、部屋の中に広がって行きました。手を繋いでいる研究室のメンバーとメイドの娘達は意識が薄らいでいく中、何か怪しげな影が蠢いているのを感じました。Ｓ婦人はというとＴ教授の方を見つめ、何やら困った表情を浮かべています。『私、粉をチョッと多くかけすぎたようだわ。若い人達は効きが早いのね！』と言いながら悪戯っぽく笑っています。Ｔ教授は、チョッと照れくさそうに『私はミントの葉を使わせてもらったよ』とＳ婦人の方を振り返り、指先に挟んだ緑色の小さな葉っぱを見せながら微笑んでいます。

「ダビデの星」とは別名「ソロモンの封印」とも呼ばれます。二つの三角形を組み合わせたデザインは、守護の象徴でもあり今ではユダヤの象徴ともなっています。古くから存在するシンボル､「剣：男性：Λ」と「杯：女性：V」を重ね合わせた記号は、ゾロアスター教の占星術でも重要な役割を持っています。そして第二次世界大戦、多くのユダヤ人がこのマークを付けさせられ、ホロコーストの悲劇につながるとは皮肉な運命なのです。

Ｔ教授メモ：十字軍が持ち帰ったバラ（rose）は 5 枚の花弁からなり、性愛の神エロス（eros）のアナグラムであり五芒星（ペンタクル）に通じる。

話は戻りますが、察しの良い方はＴ教授とＣ.Ｇ.ユング君の関係にもお気付きのことと思います。Ｓ婦人とユング君のお母さん（エミリー･プライスヴェルク）も従妹の関係です。今回の企画はＳ婦人を中心に、不思議な縁が取り持った物語なのです。

うさおさんの夢には、未来の乗り物（車）や武器（拳銃）が出てきました。
以前、夢に出てくる象徴（シンボル）の簡単な説明をしましたが、今回もおまけの説明

＊『戦い』は自己葛藤を表しています。『右手』の痛みが、権威や論理を傷つけられていることを暗示しており、『自動車』は、自分の意思で運転する強いエネルギーを示していますが、ユングの言う「セルフ」にあたり、方向やスピードに注意しないと事故のもとです。相手を攻撃する『拳銃』はフロイトの「ファルス（男性原理）的な象徴」であり、精神力とエネルギーの強さを示しているようです。

さぁ～て、いよいよ“yuko”さんの出番です。
Ｓ婦人に気に入られた様子の yuko さんは、どんな夢を見ていたのでしょう(^^;

夢によく出てくる動物に猫がいますが、今回の黒猫「ミコ」は赤い首輪をしています。猫の瞳の輝きが神秘的であり、古くはエジプトの時代イシス大女神の使いとして月との係わりも指摘され、結婚の守護神でもあります。優美な曲線や形から女性を象徴し、幸福と不幸の兆し両方に関係するようです。「赤い首輪」や「赤い血」はアレス（マルス）の色で、情熱的なエネルギーを秘めているように命を象徴しています。『予知夢』や『夢中夢』など、メランコリックな背景に当事者の心の葛藤があることを示唆しています。

流れ出した血は非合理的なものや争い、狂気を象徴していますが、流れ出る事で危機的な状況が過ぎ去ったと解釈できます。ユングやフロイトは、「夢は抑圧されたものが形を変えて出てきた」と考えています。特にコンプレックスの強い場合に、「よく夢を見る」という傾向があると考えられています。ギリシャ･ローマ時代に民衆から信仰されていたアスクレピオス神殿では、「夢を授かる」ことで病気が治癒すると言われていました。

政治の世界でも『神の信託』を告げる神官は、夢見る能力に優れたエリートなのです。「人が死ぬ夢」は嫌なものですが、ユング派では「死と再生」のテーマとして繰り返し取り上げられており、新しいものが生まれるには不可欠な部分とされています。yuko さんの夢に出てくる「百合の花の強い香り」は、死のイメージが記憶と結びついた結果、嗅覚が刺激され「百合の花」となっているようです。近しい人の死で、記憶の奥底に焼き付いている何かが有るのでしょう。

（女性原理に通じます）

＜百合：純真、聖処女のシンボル＞

人間は弱い生き物であり、嫉妬深い生き物でもあります。
常に集団の中における自分の位置付けを確認し、満足を得ようと努力をしているのです。しかし、その満足は一時的なものに終わり、「自分にないもの」、「他人が持っているもの」を欲しがります。一度『快楽』を経験すると、二度目には『不満』としか思えなくなる、不幸な仕組みが組み込まれているのでしょう。本能に従って生きている動物から見ると、「人間とは何と愚かな存在」なのかも知れません(^^;

＜以下、C.G.ユングの論文に関する解説ＨＰより引用＞

ユングはその学位論文『いわゆるオカルト的現象の心理と病理』において、従妹ヘレーネ・プライスヴェルクを「霊媒」として開かれた「交霊会」を扱ったこと（ただしこの論文では神秘的要因ではなく精神の病理的状態に帰されている）、また錬金術や占星術、易などに深くコミットしたことにより、オカルト主義的な傾向を見て取られ、また新異教主義的な人々からその預言者とみなされる傾向がある。これにはおそらく母方のプライスヴェルク家が霊能者の家系として著名だった出自も影響していると思われる。また「集合的無意識」や「元型」など一般の生物学の知見とは相容れない概念を提起することによって、20 世紀の科学から離脱して 19 世紀の自然哲学に逆戻りしてしまったという批判がある。またフロイトもユングとまだ訣別する前に、「オカルティズム」を拒絶するよう強く求めた。（一方で、ユング自身は、夢に見られる元型に関して、遺伝に関連づけて言及していたくだりがある《『分析心理学』》。無意識に蓄えられている遺伝情報は莫大であり、人の心性がそれを基礎にしているからには、その生み出すものも、その起源をはるか過去に遡ることができるとする解釈も可能であり、遺伝情報内の大量の経験データには、人に平均して訪れる体験の体系も含まれていると考えた場合、元型の普遍性も説明できるであろう。）

ただし 19 世紀末から 20 世紀初頭の状況は、一方では精神医学を極めて機能主義的に捉えることのみが科学的であり「心の治癒」といったものを語ることは出来ないという流れがあった一方で、アカデミズム以外でオカルティズムの大流行があったのみならず、ウィリアム・ジェームズのような学者も心霊主義の実験に乗り出すなど、心の問題に関するアプローチは現在以上に定まらないところもあった。こうした問題に関してユングに批判的であったフロイトも、そもそも性理論を打ち立てるのはオカルトの「黒い奔流」に対する「堅固な城塞」を築かねばならないからだという動機を口にしており、こうした問題に必ずしも安定した姿勢で臨んでばかりいたわけではなかった。

またユング自身はきわめて厳格に学問的な方法論を意識して研究を進めていたという主張もあり、こうした点について決定的な評価を下すことはまだ難しいといえる。

Ｔ教授：哀れな人間達よ！自分の欲のままに生きる事が不幸の始まりとは・・・